

十二月八日はお釈迦さまがお悟りをひらかれた日です。曹洞宗の修行道場では、十二月一日から八日未明まで集中的な坐禅修行をし、成道会という法要が営まれます。

道を成し遂げると書いて、成道。お釈迦さまが、仏と成る道を説かれたということですので、仏教が始まった日と言っても良いかもしれません。

お釈迦さまは六年間、断食などの苦行を続けてこられました。しかし、その苦行では自分の悩み苦しみが、一向に無くならないことに気が付かれたお釈迦さまは、苦行を止めて河で身を清め、食事の供養を受けて体力を回復されます。その後、一本の大きな樹の下で坐禅を行い瞑想に入りました。

この樹はインドで古くから聖なる樹と呼ばれているアシヴァッタ樹、別名をピッパラの樹ともいい、花が咲かずに実がなる樹といわれます。高さ二十メートル太さが一メートル二十センチ程に成長し、ハートの形をした緑の葉が特徴です。この樹の下に柔らかい草を敷いて、お釈迦さまは、お悟りを開くまでこの坐禅を止めないと決意したそうです。

坐禅をしていると心の中に様々な想いが巡ります。お釈迦さまもこの想いを、悪魔に譬え、襲いかかってきた悪魔を退けたそうです。

その後、更に深く坐禅の境地に入られ、十二月七日の夜から八日の朝にかけて、生老病死（しょうろうびょうし）の苦しみの原因である縁起の法を悟られ、そして苦しみを滅する四つの段階と、八つの実践方法を得ることとなりました。お釈迦さまは、ブッタ、目覚めた人に成られたのです。お釈迦さま三十五歳のときでした。

お悟りを開いた際の樹ということでこの後、アシヴァッタ樹、ピッパラの樹は、菩提樹、覚りの樹と呼ばれるようになりました。今ではこの菩提樹を「インドボダイジュ」と呼びます。西洋や中国・日本でみられる菩提樹とは種類が違うようです。外で修行されることの多いお釈迦さまの説話には、菩提樹の他にもインドの樹木が頻繁に出てまいります。

『 禅のこころ -曹洞宗- 』

成道会にあたり、今から二千五百年の昔、自然の中で菩提樹を背にして坐禅を組むお釈迦さま・・・、そのお姿と同じ姿で、今の私たちも坐禅を組んでみてはいかがでしょうか。

お悟りを開かれ、人々に悩み苦しみから離れる道をお示しになられたお釈迦さまに思いを馳^はせる良い機会としたいものです。

— 終 —